

岐阜県産材の地産地消の実践化プロジェクトによる山村地域の活性化提案活動

下呂市萩原町山之口地区の山村での地域を活性化させる木材の地産地消の実践化プロジェクト
岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科 永井祥子 中森麻菜 山本明香 柳田良造

岐阜県は森林面積が約 80%と高く全国 2 位であるが、その一方で木材生産量は全国 16 位と意外に低く、けっして林業県とは言えない現状がある。そのなかで、山村では戦後の拡大造林などにより植林された人工林では材価の低迷した結果、手入れもなされない山林が増え、地域の森林資源の荒廃も生じ、山村地域の衰退につながってきている。下呂市萩原町山之口地区の山村をフィールドに、大きなサイクルとして「切って、使って、また植える」という森林資源の循環を回復することをめざし、森林環境を守り、地域を活性化させる木材の地産地消の実践化プロジェクトの方法をさぐることをテーマにした。対象地区は、飛騨川支流の山之口川の上流部にある下呂市萩原町山之口地区の山村である。地区は歴史的に林業を中心に暮らしの基盤が形成されてきたが、山での原木価格の低迷等により、産業としての林業が衰退し、手入れもなされない山林も増え、地域の森林資源の荒廃も進みつつある。まず調査は下呂市で森林産業に係わる関係者を訪ね、その現状と木材生産量全国 16 位の要因をヒヤリングからさぐった。

南ひだ森林組合代表理事の細江広仲さんへのヒヤリング

森林組合とは主に山の手入れや、木の切り出し等、森林管理を山の所有者から請負、行う事業所で、岐阜大の位山演習林内の木の切り出しも南ひだ森林組合が請負、作業している。

岐阜県の場合、山から木を伐採して運び出す絶対量が少ない。その一番の要因は岐阜県の山は 35° 以上の傾斜地が全体の三割以上あり、急な斜面の山ばかりあることが大きい。急な斜面の切った木を運び出すには、ワイヤを山の斜面に張ってロープウェイみたいにして出す寡占集材と言う難しい技術と熟練者が必要で、そのコストはなだらかな山の多い地域の二倍以上かかると言われてきた。しかし、現在は道をつけて専用の重機を使って木を切り出す技術革新が進み、今まで一日 2 m³くらいしか出せなかったものが 2.5 倍の 5 m³くらいに出せるようになってきており、その課題も解消されつつある。ヒヤリングの翌日、岐阜大の位山演習林の急傾斜地での重機を使っての木の運び出し作業を見学した。

戦後の拡大造林で植えられた木の多くが林齢 50 年を超えてきて、伐期を迎えてきている。しかし現在、木材価格が一番底であり、檜と杉の価格が大きく下がっている。特に檜丸太の値段はピークの 1980 年頃の約 1/4 に下落し、杉との価格差も接近してきている。さらに、近年住宅の建設需要が下がっており、山から木を産出する量は拡大しつつあるが、材をうまく活用できる仕組みができてきているかという点、問題を抱えていると言わざるを得ない。

平成 24 年の下呂市の山の産出される木材の用途別の産出割合は建築用材が 49%、合板・集成材 16%、チップ材 35%である。チップ材は 8,000 円/m³に対し、建築材になると 20,000

円～30,000 円/m³になってくる。さらに原木よりも整品になるとまたどっと価格が上がる
と言えるので、やはり建築用材に多くの需要を拡大していくことが必要になってきている
と言える。

(株)金山チップセンター代表の河尻和憲さんへのヒヤリング

チップセンターとは山からでた原木を持ち込み、粉碎し、木の碎片にして製紙工場のパルプの
原料やバイオマス発電の燃料として出荷する工場である。

岐阜県で生産されている木材は、建築材や製紙工場やバイオマス発電の燃料となるチップ
などを全て合わせておよそ 40 万 m³/年である。2015 年に稼働した瑞穂市にある 5,000 k w
出力発電所に必要となる木材使用量は年間 10 万 m³になると言われる。その原料には未利用
木材を中心に使用し、不足分は一般木材、製材端材、剪定枝等を利用するとしているが、実
際は木材供給が不足し、バイオマス発電と製紙会社で原材料のチップの取り合いになって、
原木価格が高騰するのではないかと心配している。製紙工場へのチップ出荷の価格は 8,000～
9,000 円/m³。原木の値段は、安い場合 4,000 円/m³程度だが、高騰すれば 10,000 円/m³近く
にもなり、加工賃もせず、採算が合わなくなるおそれがある。

チップセンター代表の河尻さんは親の会社をついだ 2 代目だが、以前は資生堂に勤めてい
た。工場に運ばれてくる原木のなかには、綺麗な色や木理の美しい広葉樹もあり、全部チッ
プにしてしまうのも、もったいないと思って板にしたのが始まりで、そこから資生堂時代の
知り合いに紹介してもらったデザイナーと組んで家具を制作することになり、モクターブ
というブランド名をつくり、ショールームを東京の代官山に設け、これから東京に売りこん
でいきたいと意気込みをかたつけてくれた。

今回の提案活動は山之口地区内にある岐阜大学位山演習林から産出された檜や杉材を対象と
した。大学の演習林内では森林の生態や生育環境研究が主であり、しばらく原木が切り出され
ることはなかったが、演習林の経営も考え、今回林齢50年を超えるもの等のまとまった面積
での伐採が実施される事になったのである。演習林から産出した木材が県内で消費される地産
地消の可能性を、製品化のプロセスや活用デザインの方法から検討し、その実践方策を提案す
べく、切り出された檜、杉材を使い、建具や家具をデザインし、プロトタイプ作品をつくり
だすことにした。デザインした建具は、窓の内側につけ断熱性を高めるものや、地域性のある
インテリアデザインの間仕切りを目指したもので、試作はホームセンターで購入した材を木枠
に使い、完成版を演習林から産出された檜や杉材で制作した。家具はベンチ型の椅子やテー
ブルで、これも試作はホームセンターで購入した材を使い制作したが、完成版は演習林から産出
された様々な色や形の檜材や杉材をあえて適材適所で使用し、当初のデザインとは異なるもの
になったが非常にオリジナリティの高い作品をつくりだすことができた。